

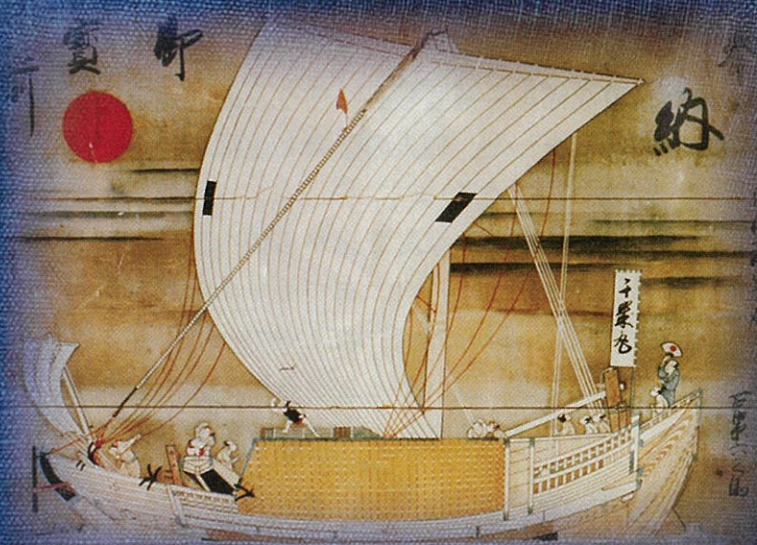
本荘郷土資料館 令和8年度 第1期 企画展

藍染めの記憶と

本荘刺し子展

北前船が運んだ手仕事の系譜

かつて本荘には、藍を染める紺屋の音と、
布を繕う刺し子の手仕事が息づいていました。
北前船が運んだ綿と、この地に根づく文化が
交わり、人々は布に祈りと知恵を託してきま
した。本展では、染織の歴史と道具を通して
「布と生きる知恵」の軌跡を辿ります。



2026年

開催期間

4/29 水 ▶ 8/22 土

昭和の日

本荘郷土資料館

〒015-0011 由利本荘市石脇字弁慶川5 TEL0184-24-3570

開館時間：午前9時から午後4時 休館日：毎週月・火曜日 ※ただし月曜日が祝日の場合は翌火・水曜日 入館料：大人100円/学生以下無料/団体20名以上で一人50円

藍染めの記憶と本荘刺し子展

～北前船が運んだ手仕事の系譜～

【企画コンセプト】

かつて、この地には「音」がありました。機を織る音、川で布を濯ぐ音、そして北前船が運んだ西国の風の音。厳しくも美しい風土の中で、人々は布に祈りと知恵を託してきました。

古くから大麻や苧麻を育てて衣服を作り、明治期には養蚕も盛んでした。そこへ北前船の物流が加わり、本荘の古雪港には西国から大量の綿花が運ばれます。綿は糸となり布となり、再び各地へ送られる拠点となったことで、この地の布文化は大きく発展しました。

本展では、こうした背景のもと、この地で花開いた「型染（紺屋）」と「刺し子」に焦点を当てています。かつて本荘には紺屋があり、職人が綿布を鮮やかな藍に染め上げ、暮らしを彩る意匠を生み出しました。

一方、家庭で受け継がれたのが刺し子です。麻や貴重な綿布を補強し長く使うため、幾重にも針を運ぶ刺し子は、家族の無事を願う祈りの造形でもありました。職人の型染と生活の知恵である刺し子は、厳しい冬を越えようとした本荘の人々の意志を映しています。

自給の大麻・苧麻から、交易で届いた綿へ。職人の紺屋仕事と、家庭で母から娘へ伝わった刺し子。それらは風土と物流の中で密接に結びつき発展してきました。今、布づくりの手触りは失われつつありますが、古い糸や布には自然と共に生きた日本人の精神が宿っています。

本展は、本荘に集積した染織の歴史や技法、道具を見つめ直し、「布と生きる知恵」を紐解く試みです。日々身にまとう布がどのように生まれ、この地で育まれてきたのか、その足跡を辿ります。

北前船が運んだものと、この土地に根ざした手仕事。それらが交わり形づくった「布の記憶」の変遷と美しさをご覧ください。

